

『バルカンをフィールドワークする』

(大修館書店 二二八ページ 一六〇〇円)

藤森 徹志

物理学や数学とは違って歴史や文化、言葉そのものをフィールドワークする研究は、一般に客観的に検証する術はない。それでも何とかして体系的な研究を行うための補助線が「フィールドワーク」なのだと思う。

ことにわれわれ日本人にとってなじみの薄い地域のフィールドワークによる研究は、読者を実際に話題の現場へ引き込む不思議な力を持つ。本書は筆者の専門分野であるスラブ言語学を中心にバルカン地方、とりわけマケドニア地方の言語的特徴を詳細に示しており、この地方の文化・歴史的研究に携わる方は参考にされたら面白いと思う。

その例として、マケドニア語の文法特徴分類とその分布を地図にした章を紹介したい。

「マケドニア語は魅力的な文法特徴に満ちた言語である」と中島氏はいう。「マケドニア語もその他のスラブ諸語（ロシア語やチェコ語など）と同じく「古代教会スラブ語（古教会スラブ語）」の母体であろうという語の子孫である」。『言語学百科事典』（ロ・クリスタル著 風間喜代三ほか監訳、大修館書店）によると、この「古代教会スラブ語（古教会スラブ語）」の祖語は「原インド・ヨーロッパ」という名称になっている。

それはさておき、言語を比較する方法には「発生論的比較」（一九世紀のドイツの言語学者アウグスト・シュライヒャーによる『系統樹説』）と「類型論的比較」（一九世紀の言語学者アウグスト・フォン・シューゲルの『形態論』にはじまる）がある。このうち、「発生論的比較」は文書が豊富なユーラシアにおいては成功したもの、その他の地域ではこの方法はうまく行かなかった。そのため、今日では音韻論、文法、意味論的なまとまりの類型を比較する「類型論

的比較」という手法が一般的になっている。

筆者の中島氏もこの「類型比較」をマケドニア語に当てはめてみた。しかし、①一般にスラブ諸語は、名詞の語尾変化などの内的変更（具体的には性・数・格の変化による語尾変化）を伴うことにより、一つの単語が同時にいくつもの文法的意味を表す（屈折的特徴）を持つ。このため語順の変化に比較的拘束されずに意味したい文章を書いたりはなしたりすることができると言語なのである。しかし、同じスラブ諸語に含まれるはずのマケドニア語にはこの（屈折的特徴）が見られない。逆に屈折的でない（語尾変化のような内的変更を伴わない）とされる言語、いわゆる「孤立語」（中国語やサモア語など）は語順が意味を決定する。②しかし、中島氏によるとマケドニア語やブルガリア語のようなスラブ諸語を利用する国の中でも南に位置する地域で話されている言葉には語順を固定する文法がないという。③かといって、日本語のような前述のいずれでもない「膠着語（語は長い接辞の連続で成り立つ）」といわれている言語に近いわけでもなく、現在の有力な言語比較方法である「発生論的比較」では括れない不思議な言語たちであるというのだ。

このあたりの中島氏の記述はこのようになっていてる。

「この文献言語（注：古教会スラブ語）は基本的にロシア語やチェコ語など現代スラブ諸語に共通の文法特徴を示しているのに、今のマケドニアとブルガリアの言語は、いわゆる屈折言語というスラブ語の類型論的基本的特徴から、すっかりかけ離れてしまっている。このように、この地方の口語は近代を迎える以前に名詞の語尾変化を

ほぼ失ったのだ。その原因については、この二言語を含むバルカン諸語に共通するバルカニズムという、これまた不思議な現象の発生とも関連して取沙汰されている。十四世紀にオスマン・トルコの支配下に入ってから、この地方がスラブ文化圏から孤立した上に、比較的短期間に急激な異言語接触の波に洗われたことがこうした現象の誘因と推測されるが、その時期の文献資料が乏しく、文献的に変化を跡付けることが難しい。（本書六二頁）」

そこで中島氏は現地マケドニアにおいて、「運動動詞」の意味分布調査（この「言」は土地により「行く」「来る」という逆の意味を表すことが判明した）や、「私」を意味する人称代名詞「Яс」・「Я」・「Я」分布調査（この「Я」は標準語の一人称代名詞「ヤス」の女性形と同じ形で、筆者を困惑させたようだ）を徹底的なフィールドワーク、とりわけ聴き取り調査を行い、周辺言語との関係などと勘案しそれぞれの調査において言語地図をつくりあげた。

もう一方の本書の魅力は、後半のいわば「バルカン紀行」。堅い言語地理学的话题を離れ、フィールドワークの際滞在したバルカン地方の人々の生活を紹介している。食生活に関しては料理のレシピを掲載しながらの内容となっており、筆者とのバルカン地方に生きる人々との温かい触れ合いの一端を知ることができる。

本書は月刊誌「月刊・言語」（大修館書店）の連載記事「ことばを訪ねる」から企画された単行本である。同時に「アフリカをフィールドワークする（梶 茂樹著）」、「アイヌ語をフィールドワークする（中川 裕著）」とともに大修館書店の「ことばを訪ねる」シリーズを構成しており、今後のシリーズのラインナップに大いに注目したいところである。